

ふれるかたち

美術の鑑賞は、通常、視覚によってイメージをとらえることにはじまります。では、そこに視覚以外の感覚が加わったなら、いったいどんな世界が広がるのでしょうか。

たとえば、触覚—手でふれること—は、作品の存在をより実感的にとらえさせ、視覚だけでは得られなかった新たな発見をもたらす可能性を秘めています。とくに、彫刻など、作者が自らの手で直接かた

ちづくった作品の場合、ふれて鑑賞することは、作者の手の感覚を追体験することにもなり、その表現の本質に近づく大きな手がかりとなるでしょう。

このように、本展では、視覚に加え、触覚をも豊かにはたかせることで、美術との新たな出会いを体験していただくものです。それぞれのかたちや肌合い、量感などをじっくりとたしかめながら、作品との対話を楽しんでみてください。

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法
1	高田 博厚	美しきエミー	1963(昭和38)	ブロンズ	18.0×35.0×28.0
2	佐藤 忠良	演劇生	1968(昭和43)	ブロンズ	20.0×30.0×46.0
3	本田 明二	黒い首	1953(昭和28)	木(マカバ)	20.0×27.0×50.5
4	峯田 敏郎	2DK	1975(昭和50)	木(ホオノキ)	78.5×181.0×118.5
5	本田 明二	馬頭	1972(昭和47)	ブロンズ	25.0×75.0×42.0
6	畠山 三代喜	春告譜	1981(昭和56)	銅板、彫鍛金	145.0×90.2
7	佐藤 忠良	ボタン	1969(昭和44)	ブロンズ	30.0×40.0×127.0
8	三木 富雄	耳	1965(昭和40)	アルミニウム	18.0×63.0×108.0
9	山内 壮夫	三人の娘たち	1959(昭和34)	ブロンズ	36.0×85.0×142.0 (台座込)
10	山内 壮夫	風	1972(昭和47)	ブロンズ	20.0×154.0×74.0
11	渡辺 信	萌芽	1978(昭和53)	ブロンズ	34.3×33.0×37.5
12	家住 利男	V.010702	2002(平成14)	板ガラス	径60.0×高さ12.0
13	流 政之	ナガレバチ	1998(平成10)	大理石	18.4×31.0×83.5
14	金沢 健一	音のかけら N5	2000(平成12)	鉄、ゴム	径300.0×高さ3.2

※寸法は縦×横、奥行×幅×高さ、または径×高さ (cm)。